

ゴキブリと私たちの生活

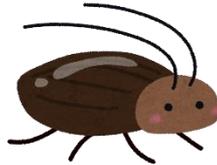
1. 嫌われ者のゴキブリ

今年も夏がやってきました。同時に昆虫の活動が活発になる季節でもあります。日本そして世界には様々な種類の昆虫が存在します。形態、生態、分布などが多岐にわり、種類によって人気者になったり、嫌われ者になったりします。人気者と嫌われ者の差は人間本位の見方や考え方によるものですが、昆虫はただ生活しているだけなのです。人気者の代表格としてはカブトムシやクワガタでしょうか。子供時代に森で捕まえたり、育てたりした思い出があることでしょうか。最近ではペットショップで人気の昆虫を購入することもでき、海外の珍しくて、大きいカブトムシやクワガタに出会う機会もあります。一方で嫌われ者の昆虫も多数存在します。ゴキブリ、蚊など、最近ではトコジラミもニュースで話題になったことを記憶しています。これらの昆虫は嫌われ者なだけではなく、人にとって有害な虫、すなわち「衛生害虫」にも分類されています。これからは嫌われ者の筆頭とも言えるゴキブリ（筆者の個人的見解）に焦点を当てて話を進めていきます。ちなみにたった今ゴキブリは嫌われ者であると説明しましたが、海外のマダガスカル島にはマダガスカルゴキブリと言う世界最大の種類があり、全長7 cm前後にまで成長します。このゴキブリはペットとして飼われることもあり、手に乗せた画像がネット上に多く見られますので驚きです。



2. ゴキブリとは

ゴキブリ、その名前の由来は「五（あるいは御）器嚙」（ゴキカブリ）と言われており、“蓋つきのお椀をかじる虫”と言う意味だそうです。別の言い方では「油虫」とも言われています。ゴキブリは、昆虫綱ゴキブリ目に属する節足動物で、世界に約4,000種類が存在します。3億年以上前の古生代石炭紀に誕生し、森林の植物や小さな昆虫の死骸を糧に大いに繁栄しました。日本には9科25属50種余りが記録されています。日本では代表的な種類として、チャバネゴキブリ、クロゴキブリ、ヤマトゴキブリ、ワモンゴキブリが挙げられます。下記はゴキブリ全般の特徴をまとめたものです。



生活史	不完全変態：孵化後、6～11回の脱皮を繰り返して成虫になります。
潜む場所	暗くて暖かい、狭い場所（シェルターになる）。集ってゴキブリの巣（コロニー）をつくる。例えば、屋内であれば冷蔵庫の裏や流し台の周囲です。
習性	夜行性。壁際に沿って歩行する。狭い隙間にも潜り込み、早く走ることができる。飛行能力はないか、低い。
食性	雑食性。本の糊や仲間の糞も食べる。
繁殖	一つの卵哨の中に、15～60個の卵が含まれており、繁殖力が非常に高い。

日本にいる代表的な4種のゴキブリの特徴も挙げます。

チャバネゴキブリ：小型のゴキブリで体長11～12mmです。飲食店、ホテルなどの建物内に生息することがあります。寒さに弱いですが、暖房整備されていれば北海道の屋内でも生息できます。似たような外観のモリチャバネゴキブリが存在しますが、こちらは飛行能力が高く、屋外で活動します。前胸背板の模様でチャバネゴキブリと識別することができます。前胸背板とは頭部と腹部の間であり、ゴキブリの頭だと思ってしまう部分です。

クロゴキブリ：大型のゴキブリで体長25～39mmです。ゴキブリと言えばこのクロゴキブリを連想する人が多いと思います。主に関東以南を中心に、日本全国に分布しています。屋外、屋内で生息します。

ヤマトゴキブリ：やや小型のゴキブリで体長20～30mmです。北海道から近畿地方にかけて分布しています。オス成虫とメス成虫の外観が大きく異なり、オスは翅を有して飛翔できますが、雌の翅は短く飛翔できません。

ワモンゴキブリ：国内で最も大きい種類のゴキブリで体長30～40mmです。低温に弱く、主に南日本に分布しています。前胸背板に黄褐色の輪の模様（輪紋）があり、これがこのゴキブリの名前の由来になっています。

3. ゴキブリが嫌われる理由

ゴキブリが人間の生活環境に潜り込んで長い年月が経ちましたが、残念ながらカブトムシやクワガタのように人気者にはなれませんでした。ここでゴキブリが嫌われる理由や人に対する害について整理しておきます。

① 見た目や動き

脂っぽく、すばしっこいです。時に人間に向かってくるような動きもします。大抵の人は、ゴキブリから逃げるか、殺虫剤や丸めた新聞などで仕留めようとするはずですが、今までに親や周囲などから受け継がれた、ゴキブリに対する悪いイメージ（不潔、不快）もあるかもしれません。

② 文化財の食害

でん粉糊が使われている文化財などが食害を受けることがあり、貴重な財産を汚損してしまうことがあります。

③ 食品への混入事故

2014年12月、人気即席麺に1匹のゴキブリが混入した事故がありました。この事故は画像付きで拡散され、製造会社は全商品の自主回収と販売中止を決定しました。その後、同社は対策と改善を行い、2015年6月に生産再開になりました。ゴキブリに限ったことではありませんが、昆虫などの“異物”が食品に混入すると社会的な影響も大きいです。購入した消費者もダメージを受け、製造会社も自主回収に加え、工場が長期間休業する事態を引き起こす可能性があります。

④ 病原体の運び屋

ゴキブリは伝染病や食中毒につながる病原体を体表や消化管などの体内に保持している可能性があります。このことがゴキブリが衛生害虫に分類される理由になっています。今まで検出された病原性のある細菌類は、サルモネラ菌、赤痢菌、コレラ菌など約40種に上っています。その他、ポリオウイルス、コクサッキーウイルス、赤痢アメーバ（原虫）なども検出報告があります。

⑤ アレルギーの抗原

病院などでアレルギー検査を受けたことがある人もいるかもしれません。アレルギー検査項目には「食物系アレルゲン」に加え、「吸入系その他アレルゲン」として、“ゴキブリ”が含まれています。個人の体質次第ですが、ゴキブリの体液、脱皮殻、死骸の破片、糞に対しアレルギー反応を引き起こす可能性があるということです。

ここまで悪いことばかり述べて来ましたが、ゴキブリの名誉のために良いところも少し述べておきたいと思います。実は食べたり、薬として利用された歴史があります。アフリカ、ジャマイカ、イギリス、オーストラリア、東南アジア、中国や日本で

食用の記録が残っています。薬としての利用は主に中国の漢方薬になります。

次回もゴキブリの話は続きますが、食品工場におけるゴキブリ対策や皆さんの家庭でできるゴキブリ対策をテーマに話を進めたいと思います。



4. 参考文献

安富和男：ゴキブリのはなし、技報堂出版

三島博文：有害生物防除マニュアル、鶏卵肉情報センター